

話を聞く力を育成する英語教育実践方法開発：ストーリーテリングの活用

Learning English through Multi-sensory Storytelling for Cultivating Communicative Abilities

有働眞理子

UDO Mariko

[要旨]

本研究は、物語を語り、それを聞くストーリーテリングという言語活動が、外国語教育に果たしうる重要な役割に注目し、教育実践方法開発に向けて、実践的なスキルを学びながら、いくつかの語りの手法の外国語教育への応用のあり方について、基本となる重要なポイントが何かを考察したものである。

お話を聞いて楽しむ文化は古今東西大切に育てられてきた。お話のメッセージをより効果的に伝えるために、語り手は表現スキルを駆使し、聞き手に対する配慮や工夫を惜しまない。それは、教育的場面においても共有される姿勢である。プロジェクトのメンバーたちは、限られた期間において、教育的な応用が期待される、音楽と言葉の関係（歌）や、音声情報に視覚情報を手堅く提供する紙芝居など、オーソドックスな（文字を使用しない）ストーリーテリングに加えて、実践方法に取り入れることが可能な知識やスキルを4回の実践ワークショップ・セミナーを開催し、現職教員を中心とする参加者と共同で活動しながら、経験知を積んだ。

物語という素材の選択に加え、私たちは、英語教育に特別支援の視点や手法を積極的に取り入れること、具体的には、多感覚の対話表現・身体表現を多用することが、学習の負荷を少しでも減じて、外国語学習を効率化することに繋がるという言語学習観に基づいて、それを実現する教育的に魅力のある方法を開発することを目指した。Jolly Music や紙芝居など、様々な語りの表現手法を知り、英語表現を音声化する際の音声学・音韻論の知識を反映させたプレゼンテーションにするなど、物語がより魅力的に聞き手に伝わる方法について考察した。

キーワード：マルチセンソリー・ストーリーテリング、英語教育、特別支援

Key words: multi-sensory storytelling, English education, special education

1. 研究の概要

本研究は、特別な支援を必要とする知的障害児・者の対話能力促進に関する知見と、言語学の知見を反映させた英語教育実践を融合させることによって、支援を必要とする児童のいるインクルーシブな環境の教室における外国語活動を可能にする英語教育実践方法を開発することを目的として進められた。特に、文字指導が導入された小学校英語教育においては、これまで強調されてきた音声への関心や意識の育成が、現在は文字との関連において語られることが多い傾向にある。そのような状況において、あえて音声表現を中心に据えた活動を志向し、対話的かつ多感覚の手法を取り入れ、聞く力を育む効果の高いと言われるストーリーテリングを英語で実践する活動を様々な企画し、実践に取り組んだ。

2. 研究の目的と方法

研究の背景として、メンバー中代表者有働と分担者高野が、知的障害児・者の対話行動と教育の関係に関する共同研究を長期に渡って実施してきた経過があるが、特別な支援を必要とする子どもに通用しうることばの学びには、言語獲得・習得の普遍的な特性が現れる現象を観察する経験を重ね、そこで見られた身体性の高い対話行動のあり方が英語学習の手がかりとなる可能性が高いと予測するのは、自然な流れであった。発話中のオノマトペ的な表現がもたらす音の面白さや、ことばのリズムが身体の動きと同期する様子は、外国語であっても言語音に反応する可能性を示唆した。そういったことばの音楽性を最大限に活かして楽しむ言語文化の一つとして、私たちは英国で豊かに展開しているマルチセンソリー・ストーリーテリング（以下 MSST と略記）に大いに注目し、2015 年前後から学びと研究を重ねてきた（詳細は「ことばと音楽 de 支援」サイトを参照）。英国では、日本の語り文化とはかなり異なり、語り手になるための専門的な学校があったり、通りを歩いていると大道芸人が語りを披露していたり、全国レベルの語りのフェスティバルがあったりと、日常生活に深く浸透しているためか、学校教育においても物語を教育に組み込んだコミュニケーション能力育成のための授業が実施されることも多い（例えば、Joffe (2011) , Grove (2008, 2012)）。さらに、言語発達に課題のある子どもたちを専門的に支援するスピーチセラピスト（言語療法士）が学校教育において一定の役割をもっており、教育に果たす役割も無視できない。

MSST は五感を駆使してお話を語るので、知的障害のある子どもたちも音声や身振りを手がかりに、物語の展開を楽しむことができるのが大きな魅力である。出来事の展開を追うのみならず、描かれた内容や人物像を理解した結果、反抗的な態度が改善されたり、外国や外国人への関心の高まりが見られたり、教育的効果も見られる(高野他(2017), 有働・高野 (2018))。対話能力に課題を抱える子どもたちの興味を惹きつけたのは、語りの言語・身体表現が物語の内容の面白さを引き立てたところにあるが、外国語という負荷を抱えて対話困難を経験する英語の授業においては、英語の音の面白さと語る際の身振り・手振りの組み合わせがうまくいくと、英語の学びへの動機付けや理解の深まりを助けることになる。1 年間という限られた期間でできることとして、英語でお話を楽しむ活動を、専門家の講師を招いて、現職の学校教師(小学校・中学校・高等学校・特別支援学校)や言語療法士、保育士・保育専門家等 20 人~30 人規模の参加者を得て、異なる語りの手法・アプローチを学び、参加者間で活動を実際に共同で考案し実践する機会を設けて、実施することとした。物語活用の英語教育実践方法の成熟にはまだ経験と時間と手間を重ねる必要があるが、この研究方法によって、語りの手法のレパートリーを知り、音声や体の動かし方をお話語りの適材適所に活かすコツが得られるのではないかと考えた。以下に、実践研究の内容と結果について紹介し、考察する。

3. Jolly Music を活用した、リズム感豊かな物語の語り

8 月に山下桂世子氏を講師として迎え、Jolly Music を使用した語りのセミナーを開催した。Jolly Music は、Jolly Phonics と同様に、英国で開発された教育プログラムである。Jolly Phonics は、言語音と文字(文字と文字連鎖)の関係を学ぶためのものであり、専属講師である山下氏のカリスマ的な魅力もあって、瞬く間に全国の小学校教師の間で絶大な人気を得て現在に至るもので、国内の教育界においては、このフォニックスのプログラムが先行し、広く実践されている。本研究では、音声や音楽性を中心的なモードと捉えているので、文字情報は考察にいれず、Jolly Music の基本コンセプトを通して、基礎的で英語学習に応用しやすい歌のあり方を考えることとした。素材を一つ学んで、物語を語る活動実践につなげることとした。

以下(次頁)のチラシにも記載があるように、音楽の教育プログラムと言いながら、口を楽器のように捉えているので、口で作れる音やことばの音、あるいは、音楽とことばが調和的に結合した「歌」という音楽的なことば

を演習していく内容になっている。

令和元年度第1回ストーリーテリングde特別支援

Jolly Music でつくる街

～山下桂世子先生と楽しもう、歌で綴るお話しと遊び～

日時 令和元年8月21日(水)13時～17時
場所 兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス兵教ホール
対象 特別支援の視点を持つことばの学びに関心のある保育士・教員(幼・小・中・高・特支・大)、大学院生、学部生など
参加費 無料

物語を楽しみながら対話を促進するための活動について、今回は歌の活用を取り上げます。英国で人気のJolly Musicの理論的育量や導入時のスキルを知り、歌活動の楽しさを体験してみませんか。特別支援活動や、英語学習初期の音声教育実践にも役に立つ知識とスキルが学べます。

山下桂世子先生のこと

岡崎市の小学校での特別支援学級担当等の経験を生かして、生活の拠点が英国へ移った後も、英語を母語としない子どもの支援・teaching assistantの仕事に従事。2012年ノッティンガム大学で特別支援教育修士号を取得した後、Jolly Phonicsのトレーナーとなり、日本各地で指導を行っている。

Jolly Musicのこと

Jolly Music は「コダーイ音楽」をベースにしたイギリスの小学校で用いられている音楽プログラムです。歌と音楽を通して音楽と母語の基礎をつくれます。公園でシーソーに乗ったり、犬と遊んだり、歌いながら遊ぶ世界を広げていく子どものものになってみませんか。

お申し込み方法: メールにて、ご氏名、ご所属、「Jolly Music セミナー希望」の件名を明記の上、maruido@icloud.com (有働真理子宛)にお送りください。

世話人: 有働真理子・高野美由紀

1

ストーリーテリング de 特別支援

Jolly Music でつくる街!

Jolly Music は「コダーイ音楽」をベースにしたイギリスの小学校で用いられている音楽プログラムです。コダーイは人はみな、自分の中に楽器を持っている、それが口だということ。歌と体を通して音楽の基礎を習得していきます。また、コダーイは子供たちにとって一番しっくりくるのは母語だということ、その国のわらべ歌を用いています。今回は、イギリスのわらべ歌＝ナーサリーライムを紹介します。

子供が一度馴染んでいる言葉は「マミー(お母さん)」で、その音階は「ソ・ミ」。

この二つの音階から始まって、徐々に音階が増えていきます。Up and down の歌に乗って自分が行きたい夢の街へ行ったり、公園で see-saw に乗ったり、Dorothy, Dorothy と犬と遊んだり……。そんな世界を楽しみませんか。

講師: 山下桂世子(やましたかよこ)

愛知県岡崎市の小学校で勤務(通常学級と特別支援学級)後、イギリスへ。現地の小学校で英語を母語としない子どもたちへの支援。2012年にノッティンガム大学特別支援修士号を取得。現在はteaching assistantとして勤務。2013年にJolly Phonicsのトレーナーとなり、日本でトレーニングを行う。

Jolly Music は音痴な自分でも指導ができると感じ、現地で日本の子どもたちに指導。また、Jolly Musicを通して英語のリズムについて初めて知り、日本の子どもたちや先生にも知ってもらいたいと、時々、ワークショップを開催。

著書:

『はじめてのジョリーフォニックス(教師用、生使用)』東京書籍 監修
『ワーキングメモリと英語入門』北大路書房 湯澤美紀、湯澤正通、山下桂世子共著
『目指せ! 英語のユニバーサルデザイン授業』学研プラス 村上加代子編(一部担当)
『初めてのシンセティックフォニックス授業』(DVD) ジャパンライム

2

1

Jolly Music は、歌を中心に、段階的に音楽のスキルを学ぶためのプログラムである。最も基本的な「ソ」と「ミ」を往復する単純なメロディを、日本語母語話者にも馴染みやすい、均一の長さで整えられたモーラのリズムがゆったりと続き、そのリズムにことばを載せれば、ナーサリーライムのような歌を気軽に楽しめる作りになっている。素晴らしいのは、短い歌のフレーズを繋いでいきながら、少しずつストーリーを展開して、ちょっとしたお話に仕立て上げられる活動が可能であるという点である(次頁提示の山下氏提供配布資料を参照のこと)。実践活動においては、配布資料の一番下の連(「Up and Down」)をモチーフとし、場所移動や身体の動きなど、上下の動きに対応する文脈を考案し、組み合わせて行ってストーリーになるように創作を行った。発表に際しても、まるで小学生のように参加者が夢中になって取り組んだ工作活動を通して、色紙、ハサミ、カラーサインペンなどを使って、短時間で頭にかぶれる、動物などを表す帽子(バンド)を作成し、オリジナルな物語をコダーイの音楽で語っていく際に小道具として活用するといった状況であった。

- ジョリーミュージックとは？
ハンガリーのコダーイの音楽をもとにしたメソッド
 - ・ Music is for everyone
 - ・ 誰でも使えるもの＝歌
 - ・ 3-7 歳が理想
 - ・ 耳を育ててから記号（イラストを使って）
 - ・ かかれているものを聞くことができ、聞いたものをかくことができる
 - ・ 最初は ♪ソーミ♪ から・・・mummy
 - ・ 動き
- Musical skills
 - ・ pulse 拍
 - ・ rhythm リズム
 - ・ pitch 音の調子
 - ・ musical memory ミュージカルメモリー
 - ・ inner hearing 自分の声を聞くこと
 - ・ listening リスニング
 - ・ ensemble work 合奏
- 英語と音楽
 - ・ 英語はアクセント（強弱）の言語、しっかりとしたビート
 - ・ アクセント（音節）がリズムを作る、アクセントからアクセントへの距離がほぼ同じ
 - the cows eat the grass
 - the cows eat the grass
 - the cows will eat the grass
 - the cows will have eaten the grass
 - ・ 英語は 1,2,4 というビートパターンをしており、4拍目にお休みがくる。ネイティブは無意識にこの「休む」ということをしている。
- コダーイ
 - ・ エコー⇒パターン⇒ショートパターン
 - ・ 繰り返し
 - ・ Stand up, Sit down. Hello ~. See-Saw. Game
- See-saw
See saw up and down
in the air and on the ground
- Up and Down
Up and Down and Up and Down
This is the way to the London town

その場には、英語を教えることを専門としない参加者も含まれていたが、英語教育の背景がない人々も共に活動を楽しめたことから、小学生の英語初学者や特別支援学校の児童・生徒に向けて、授業を実践してみたいという感想が寄せられた。後日、この中の参加者で特別支援学校で実際に（英語ではないが、お話の）授業を実施したら、大変好評であったと報告を受けた。小学校では、Jolly Music のテキストにおいて標準の歌として提示されている歌を練習するだけでも、英語のリズムに慣れ親しむことができると考える。中学生に应用する時は、基本の歌を練習した後に、ワークショップで実践したように、自分のオリジナルな歌のフレーズを作文して綴っていくこともできるであろう。同じパタンを繰り返して、短いお話を作る創造的な活動に十分展開可能である。

4. 英語母語話者を交えた「大きなカブ」の教育実践

2019 年 11 月に、英国の語り手である Nicola Grove 氏が、本研究プロジェクトのメンバーである岡本真砂夫教諭の勤務する姫路市八幡小学校に出向いて、小学校英語教育において最もよく知られた外国の物語である「大きなかぶ」の他、小学生たちにとっては初めて遭遇する、知的障害者が主人公の物語「ものぐさジャック(Silly Jack)」を、参加型スタイルで語ってもらい、子どもたちの反応を見学する機会を得た。

「ものぐさジャック」は、6 年生の外国語活動の授業として実施されたが、児童は、'Go and get some work.', 'Go and work for a farmer.', 'How did you get on?'などの文表現、承諾・承認を表現する'very well'を練習し、合図に従って、物語の語りの途中で、セリフのようにそれらの表現を発話して参加できるよう、タイミング良く Grove 氏と岡本教諭に促されていた。物語には、それぞれ、何らかのメッセージが込められているが、身振りや絵などの視覚情報、演技力豊かな身体の動きや表情、音声表現が助けとなり、出来事の流れが把握できていた。このお話は、障害があっても、失敗が多くても、思わぬきっかけで幸運に恵まれることもあるという筋書きで、障害を持った人々の存在を感じ、馴染むことになる。また、粉挽などの異文化理解につながる場面設定や道具立てがあり、子どもたちの興味を引いたようであった。なお、事前に難しい語彙をわかりやすい語彙に置き換える作業を施したが、難しいと思われる単語や表現に対しては、わかりやすい、または知っている語彙で表現することが、理解を助けることになるのは当然のことである。一例を挙げると、お話の冒頭の箇所は、以下のように、'decide'も'look for'も未修であるため、学習した表現('wants to')に変えられた。

Jack lives with his **mum**.

they are very **poor**

Jack **decides to look for** **wants to work**.

3年生の活動として「大きなかぶ」が語られたが、模造紙で作られたかぶを一人ずつ選ばれた児童が出てきて引っ張るという、お話の中の状況を実演する形で参加していた。キーワードの'turnip', 大きい意味を表す'big', 'enormous'をつけて、表現する練習がなされ、'big'の母音を長く発音する指導があった。この選択は、実は、なかなか興味深い英語発音練習の機会を提供するものである。日本語話者の癖として、長母音や二重母音でない限り、母音を短く発音してしまうことが多いので、日本語話者の発音がぶつぶつ途切れた感じで聞きづらく（しばしば'choppy'と形容される）、コミュニケーションの快適な音響的環境を阻害しているのであるが、有声音に挟まれた母音は長く発音するというようにすれば、英語らしい音声の表出となる。それはまた、音的な効果だけでなく、意味をよりリアルに伝えることにつながるので、発音を繰り返し練習することは、意味を伝えやすくするためにも大変重要な学習課題なのである。

5. お話を語る時に必要な音声文法の学び

11月に姫路の小学校で実施された Nicola Grove 氏による英語のお話語りの実践を、12月の研究活動の講師である川越いつえ氏にも参加・見学していただいた上で、発音の学びの教材の選定を検討していただいた。八幡小学校の英語授業のための教室に展示されている大型絵本の中から、小学生にも人気が高いという *Fortunately* という作品を選び、適切な語りのための練習課題を準備し、12月中旬に英語音声指導について実践しながら学ぶ研究会において、絵本や You tube 動画等を使用して、発音練習のポイントを拾って練習を行なった。この物語は、'fortunately'と'unfortunately'という対立概念を表す副詞が繰り返されて、お話が進行する。以下に物語の全体を提示する。

Fortunately (行番号は便宜上追加)

1. Fortunately one day, Ned got a letter that said, "Please come to a Surprise Party."
2. But unfortunately the party was in Florida and he was in New York.
3. Fortunately a friend loaned him an airplane.
4. Unfortunately the motor exploded.
5. Fortunately there was a parachute in the airplane.
6. Unfortunately there was a hole in the parachute.
7. Fortunately there was a haystack on the ground.
8. Unfortunately there was a pitchfork in the haystack.
9. Fortunately he missed the pitchfork.
10. Unfortunately he missed the haystack.
11. Fortunately he landed in water.
12. Unfortunately there were sharks in the water.
13. Fortunately he could swim.
14. Unfortunately there were tigers on the land.
15. Fortunately he could run.
16. Unfortunately he ran into a deep dark cave.
17. Fortunately he could dig.
18. Unfortunately he dug himself into a fancy ballroom.
19. Fortunately there was a surprise party going on.
20. And fortunately the party was for him, because fortunately it was his birthday!

The end.

音声指導のポイントを把握し、適切に音読できるようになるための作業課題としては、(1) 息継ぎや意味の区切

りをつける、(2) 強勢箇所の確認、(3) イントネーションのピークを把握する、(4) トーン（上昇調・下降調・上昇下降調・下降上昇調）をつける、の4点が与えられた。答えを導く手がかりは次のとおりである。

- (1) Put slashes (/) at the end of the intonation phrases (**breaks**)
- (2) Underline the **stressed syllables**.
- (3) Circle the **peaks** (bold letters), which is one for each intonation phrase.
- (4) Mark **pitch movements**, rise ↗, fall ↘, flat → or fall-rise ↘↗ for each peak.

(1) Break を入れるかどうかは読み手の裁量と発話速度などにより変わるけれども、break を入れる場所は文法的な切れ目が多いこと、(2) Stress (Stressed syllables) は内容語（名詞、形容詞、動詞、副詞）の強勢音節につくこと、(3) Peak は stress の中の1つがより際立って発音され、意味的に大事なものであること、そして(4) Peak が stressed syllables のどれになるかは読み手の裁量が大きいが、とくに意味上際立つものがない場合には、句中の最後の stressed syllable になる(End focus rule)ことなど、音読指導に直結する、重要な音声文法のポイントを確認した。(なお、このセッションにおいては、他に、*Pete the Cat* の動画も視聴したことを付記しておく。)

発音といえば大抵の場合、音素の発音などいわゆる調音の話題が中心になりやすいが、話の流れや伝えたい意味を適切に表現するには、英語の適切なプロソディ（韻律：リズムやメロディ）をしっかりと学び、練習を重ねる必要がある。この課題は、現在の学校英語教育では、文法指導などに比べてかなり手薄な状態となっている。物語を面白く語り、興味を持って話を聞くことが可能になるよう、音声表現の情報を確認する準備は不可欠であり、校種に応じて、適切な音声指導の手がかりが、お話を語ったり聞いたりするときの内容理解や鑑賞の手助けになることは間違いない。今後具体的な指導方法を記述していきたいと考え、継続的に活動している。

6. 日本独自の語りの手法である紙芝居の学び

コロナの流行により全国的に休校措置が取られるようになっていく直前の2月下旬に、予定していた紙芝居による語りを学ぶ研究会を実施することができた。日本独自の紙芝居は、海外でも実は非常に人気が高い。実践研

究会のテーマとしては、「おはなしと紙芝居 一楽しませる技へのチャレンジ」とし、紙芝居を、マルチセンソリー・ストーリーテリングの手法の一つとして学ぶ（視覚情報の提示や、身体の動き、音声の使い方を組み合わせて、楽しく語る、聴いて楽しむ活動を実践する）ことを目標とし、可能な限り日本語および英語の両方で実践することを意識した。公立学校（特別支援学校）退職後公演活動を国内外で展開し、活躍する野間成之氏を紙芝居講師として、また、英国の大学で英文学を学び、英国の語り手の学校で母語話者と共に本格的な研鑽を積み、松山お話の会を設立し、会長として活躍する光藤由美子氏を、お話の講師としてお招きした。また、セミナー参加に先立ち、「紙芝居ネット」という紙芝居情報サイトの中の、「紙芝居の演じ方」（子どもの文化研究所の右手和子氏による演じ方講座（<http://www.kamishibai.net/sp/play/>））を視聴して、紙芝居のノウハウに触れておくことを事前の準備課題として参加者にお願いした。

野間氏の演目としては、「鉄腕アトム：ウランちゃんの巻」（12 場面）で始まり、グループワーク課題の作品（「ひもかとおもったら」、「でんしゃがくるよ」、「かめのえんそく」）の語りを視聴したうえで、練習方法、注意事項、コツ等を学び、4 人一組の 6 グループで実践練習をして発表し、コメントをいただいた。道具立てとして、語りの視覚情報となる紙芝居本体と、それを見せるための紙芝居舞台を使用するが、抜き方や絵の見せ方、語り方のコツやタイミングなど、場面の表現効果を高めるスキルが数多くあり、非常に良い練習になったと、参加者から感想が得られた。「ひもかとおもったら」は英語版、「森のキツツキさん」の手遊び、「まんまるまんまたんたかたん」、「あひるのおうさま（フランス民話）」、高齢者用の紙芝居ど（「どんとこいさんずのかわ」）なども紹介され、世界の紙芝居事情についても言及があり、盛りだくさんのセッションとなった。

午後の光藤由美子氏によるお話の学びにおいては、ことば遊びや動作のオノマトペにより、言語音を活用したお話遊びが紹介された。また、小道具を効果的に語りの中で使うことにより、お話の変化や展開のきっかけを作れること、さらに、例えば視覚障害のある人のために音が出る小道具を使用するなど、子どもの特性に応じた工夫や配慮が望ましいことなどを、実践練習を通して学ぶことができた。小道具を使うことは必須ではなく、何も道具立てがなくても、語り手さえいれば、お話を共有することが可能な、最も素朴で（良い意味で）原始的なストーリーテリングは、ことばの学びに最適のスタイルかもしれない。

7. 結び

特別な支援を必要とする子どもたちのために行う配慮や工夫は、その多くが、外国語を教えるときのスキルに
応用することが可能である。Jolly Music が取り上げるシンプルな音楽的構造の歌は、歌の実践を通して英語のリ
ズムに慣れ親しくことが可能であることがわかった。リズムの学びにおいては、チャンツが好まれることが従来
は多かったが、強勢やイントネーション、トーンの表情に通じる要素を含む意味では、リズムを刻むだけのチャ
ンツよりも、英語の豊かな音声表現へのアプローチとしては、歌の方が優れているかもしれない。チャンツの音
楽性と歌の音楽性の深みと広がりを考えれば、容易に予測が立つことではあるだろう。絵本を読んで聴かせる活
動においては、音声情報が日常言語的なものであったり、歌や詩のように音楽性の高いものであったり、教材の
ジャンルに応じて、音声によるプレゼンテーションに際して、相応のスキルを駆使するのが良い。それにより、
目の前の話を聞く動機付けや、聞き取る精度に影響が生じると思われる。

質的に優れた音声表現によって、効果的に意味が伝わったら、お話の内容理解が進み、理解した内容について、
自分の経験と照らし合わせて考察したり、議論したりすることが可能となる。物語は、太古の時代からメッセー
ジを運びたものとして継承されてきた。英語学習に気遅れがある子供が英語を学ぶ素材として、昔話や民話など
は、身近で単純化されてもなお洗練されている内容を持つものであり、今後適切な教材を選び、効果的で興味を
惹きつける取り組み方の方法を開発すれば、対話能力の発達に貢献することが大いに期待できる。物語と外国語
の学びを組み合わせが優れた方法であるという考え方を支持する英語教育実践家は少なくない（例えば、
Wright(2008)）。

1年間の短い間の取り組みとしては、多様な語りの方法を小・中学校や特別支援学校の活動に応用できそうな
スタイルで実践し、学ぶことができたという意味では、研究の目的は概ね達成できたと考えている。この認識や
えた知識・スキルをどのように授業活動に展開していくか、実践研究を引き続き進めていきたい。

参考文献

Grove, Nicola. (2008). *The Big Book of Storysharing: A Handbook for Personal Storytelling with Children and Young
People Who Have Severe Communication Difficulties*. Routledge.

_____. (2012). : *Using Storytelling to Support Children and Adults with Special Needs: Transforming lives through telling tales*. Routledge.

Joffe, Victoria. (2011). *Narrative Intervention Programme*. Routledge.

Wright, Andrew. (2008). *Storytelling with Children*. Oxford University Press.

有働眞理子・高野美由紀 (2018) 「知的障害児・者の音楽的活動の場に見る発話の音楽性と対話活性化の関係：対話と音に彩られるマルチセンソリー・ストーリーテリング」、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C)研究成果報告書.

高野美由紀、有働眞理子、上田直子、武田博子、光藤由美子 (2017) 「知的障害のある生徒におこなう昔話のマルチセンソリー・ストーリーテリングー語り手の工夫に焦点を当ててー」兵庫教育大学研究紀要 第50巻 pp.11-19 pp.

参考ウェブサイト

「ことばと音楽 de 支援 (有働眞理子・高野美由紀共同研究サイト)」 <http://mucollabo.jp/index.html>